

氏名	鄒文君
学位の種類	博士(文学)
報告番号	甲第461号
学位授与年月日	2017年9月19日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日 文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	原因・結果を表す漢語についての研究
審査委員	(主査) 沖森 卓也 石川 巧 本学文学研究科(日本文学)教授 陳 力衛 成城大学経済学部教授

I. 論文の内容の要旨

(1) 論文の構成

- 序章 本研究について
- 第一章 「原因」について
- 第二章 「因縁」の成立と意味変遷
- 第三章 「因」字を含む漢語
- 第四章 「素因」について
- 第五章 「理由」について
- 第六章 「由」字を含む漢語
- 第七章 「結果」について
- 第八章 「因果」の受容と意味変遷
- 第九章 「成果」について
- 終章 原因・結果を表す漢語の全体像
- 参考文献

(2) 論文の内容要旨

本論文は、「原因」「結果」など因果関係を表す一群の語彙に関して、密接な意義関係にある各語がどのような過程を経て成立し展開されてきたのか、その語誌を究明しようとする研究である。対象となる語には、「因縁・因果」のような仏教語に由来する、歴史の古い漢語がある一方、「理由・成果」のような近代になって新たに成立した語もある。後者は、近代日本に移入された西洋の事物・概念に応じて出現した、いわゆる新漢語であるが、前者も近代に西洋から導入された概念が反映されており、いわば再解釈を経て再生したものである。このような、因果関係を表す漢語の成立・受容の過程、そして意味変遷をめぐる諸問題について論じる。序章では、研究の目的・背景・方法を説明した上で、第一章では「原因」、第二章では「因縁」、第三章では漢字「因」を含む漢語「起因・遠因・近因・誘因・因子・要因」など、第四章では「素因」および反転語「因素」、第五章では「理由」、第六章では「由」を含む漢語「縁由・原由・因由・由来・来由」、第七章では「結果」、第八章では主に「因果」、第九章では「成果」について論述する。終章では、原因・結果を表す漢語の全体像をまとめ、各章での考察を踏まえて、その成立パターンを3つに分け、①古典漢語（漢籍語や仏教語など）からの転義（因果・因縁）、②中国語（白話小説語や洋学資料の訳語など）の借用（原因・結果）、③日本独自の創出（理由・成果）にまとめる。また、その成立の要因として漢語の語構成にも着目し、語の成立または意味変化に大きく関係することを指摘する。

II. 論文審査の結果の要旨

(1) 論文の特徴

本論文は、因果関係の意を表す一群の語彙を、旧来の古典漢語の系譜を踏まえた上で、近代日本における西洋的概念との接触において新たに成立したり、意味変化を遂げたりした過程を克明に究明するものである。これまで近代語における語彙研究は、ある書物や辞書などを中心に据えて新語の出現というテーマで進められることが多く、相互に関連の深い語彙を総体として語誌的に研究することはあまりなかった。近代における訳語の出現は西洋の学問を体系的に受容したことによるのであるから、その語義を中心に据えて類義的対照的な意味関係にある語を一つのまとまりとして研究対象とすることの意義は大きい。また、研究方法においても、古典漢文では漢籍だけでなく仏教語にも重点を置き、漢訳仏典における用例をも精力的に調査するとともに、近代漢語の成立には翻訳が深く関与していることから、和訳洋書や蘭和・英和辞書、特に蘭学関係の翻訳書にも注意深く目を配る一方、中国側資料の白話、唐話の類、および英華字典など広く日中の資料を調査した上で、手堅く分析している点は史的研究としてバランスのとれた論考となっている。日中の語彙交流を双方の視点から客観的かつダイナミックに考察する本論文は新たな重要な試みである。

(2) 論文の評価

その語の使用や、近代的意味への転用の最も古い例について、従来の指摘をさらに遡る時期のものを発掘するとともに、諸分野の学問、また専門用語辞典や国語辞典などを通して、日本語として定着していく過程を語誌的に解明しえた点は、日本語史研究の上で大きな達成であると言える。また、意味が変化し語義が再認識される際に、語構成が新漢語の形成において大きな意味を持つことを例証した点も意義深い。たとえば、「原因」は「病原」を表す「原」と「病因」を表す「因」、「結果」は「結局、終わり」を表す「結」と「果」というように、因果関係を表す語の多くが当初類義関係の結合として捉えられていたことを明らかにしたことは、訳語創出における一つの方法を提示したもので、ユニークな視点として注目される。その一方で、資料の扱い方が一面的であり、翻刻やデータベースなどに対する依存度が高いという指摘もあった。古代から近代までにはさまざまな分野に膨大な資料が残されており、それぞれの資料の位置づけや解釈には多くの蓄積を要する。通史的研究における課題を一つ一つ克服していくことが論文の質のさらなる向上へと繋がろう。本論文は、特定の語彙を体系的に総体として研究対象とし、それぞれの語誌を有機的に捉え、その全貌を明らかにした先駆的研究として高く評価できる。